

中ソ対立の背景と真相
(5)

東北区(旧満州)をめぐる中ソ間の角逐

—高崗事件との関連—

昭和50年10月

はじめに

わが国ではいま、日中平和友好条約交渉における、いわゆる「覇権」問題に直面している。

「覇権」という特殊な用語をソ連^{II}「社会帝国主義」の対外行動を描写する言葉として明白に定義づけている中国は、今後もひきつづき「覇権」問題に固執するであろう。その理由は第一に、中国にとって「覇権」条項入りの日中平和友好条約は、ソ連が今日、「協議条項」（ソ印間の平和友好協力条約^{八一}一九七一年^Vのように一旦緩急あれば両締約国が政治と軍事の面で協議する旨の条項）入りの平和友好条約をアジア全域に張りめぐらそうとしていることへの対抗的かつ有効な橋頭堡になり得るからであろう。第二には、「大東亜共栄圏」時代の日本語に由来する「覇権」という言葉の特殊な来歴からしても、また、わが国の今日の国際的位置からしても、中国としては日本との平和友好条約を是非とも「覇権」条項入りの条約の先例にしたいからだと思われる。つまり、「覇権」条項入りの日中平和友好条約は、ある意味で「日中安保条約」的な性格を帯びた条約になるのであり、それゆえ、わが国がもしもこの問題での対応を誤れば、中ソの深刻な対

立に深くコミットしかなない、わが国の当面の外交にとってもきわめて刺激の多い難題なのである。

しかも、今日の中国は、毛・周以後の時代への歴史的移行期にあり、ブレジネフ体制のソ連もまたすでに長期の政治的足跡を刻んできている。そのような状況のなかで、われわれは、毛・周以後の時代の中国や中ソ対立の将来についての巨大な不可測性に当面しているといわねばならない。それだけに、このような不可測性のヴェールを通してできるかぎり正確に将来を見通すためには、やはり中ソ対立の歴史的航跡を実証的に跡づけ、そこから問題を解くカギを引き出すことが必要であろう。

われわれは、このような前提に立って、ここ数年来、「中ソ対立の背景と真相」をテーマに研究を進めてきた。

そして、この研究の成果としてすでに報告書を完成した諸課題は次のとおりである。「Ⅰ、中ソ同盟の真実と中ソの軍事・防衛抗争」（昭和四十七年三月）、「Ⅱ、朝鮮戦争をめぐる中ソ間の秘められた対立」（昭和五十年一月）、「Ⅳ、国境紛争から中ソ会談への進展と中国政治の変容」（昭和四十九年三月）、「Ⅴ、台湾の将来と中ソ関係」（昭和四十九年一月）。

本報告は、当初の研究計画のなかで残された最後の課題である「Ⅲ、東北区（旧満州）をめぐる中ソ間の角逐——高崗事件との関連——」についての研究報告であり、今回の報告をもって、この研究計画は一応の完成を見たことになる。

ところで、建国後最初の党内闘争としての高崗事件とその舞台としての東北（旧満州）を「中ソ対立の背景と真相」のなかに組み込んで再検討しようとする試みは、きわめて刺激的な作業であると同時に、第一次資料に欠けるため大胆な仮説と論理的な整合性を必要とする困難な作業であったが、幸いにして、最近公表されたフルシチョフ回想録や毛沢東の未公式談話などは本研究にとってもきわめて有意味なものであった。

われわれの研究の結論としていえることは、高崗事件は、たんに東北を「独立王国」化しようとした中央と地方の権力的角逐であったばかりか、中ソ対立の歴史的土壌としての東北を舞台としたスターリンと毛沢東ないしは中国共産党中央との抗争の一環に位置すべき、きわめて重大な国際的背景をもった事件であったということである。

目次

はじめに

- 一、高崗事件の今日的意味 1
- 二、「反党同盟」の摘発とその形成 9
- 三、事件の真相と性格 18
- 四、権力の地方化と高崗 25
- 五、ソ連にとっての東北 30
- 六、スターリンと高崗 36

一、高崗事件の今日的意味

一九五五年三月三十一日に中国共産党全国代表者会議を通過した「高崗・饒漱石の反党同盟にかんする決議」（『人民日報』一九五五年四月五日）は、高崗、饒漱石らの党首脳が党中央に反逆し、東北地区を「独立王国たらしめようとした」その罪状を激しくあばきたてた。「彼らは、当面の階級闘争の特殊な環境のなかで、党内に生まれた、党と国家の指導権の篡奪を企図する、まったく無原則的な陰謀集団である」と非難して、いわゆる高崗事件（正しくは高崗・饒漱石事件といふべきであるが、ここでは以下、高崗事件と略述する）の深刻な内面を暗示したのである。同時に、中央人民政府副主席として、中国共産党最高指導層の一翼を担っていた高崗の「自殺」という衝撃的な「事実」が「高崗は党にたいして頭を下げ罪を認めなかったばかりか、かえって自殺することによって党にたいする最後の反逆の意志を表示した」という表現で公表され、内外に波紋を投じたのである。このような高崗事件は、建国後の中国における最初の党内闘争ないしは中共党史上最初に表出した肅清事件として記憶されてきたが、もとより、事件の全容はヴェー

ルに包まれたままであったのである。

だが、中ソ対立の隠された歴史的航跡が、われわれ自身のこれまでの研究によっても明らかに
なり、中ソ対立の真実に迫る多くの状況証拠やいくつかの未公開資料が出現したことによって、
ヴェールは徐々にはがれはじめてきた。すなわち、高崗事件は、それが東北を舞台としていたこ
と、しかも毛沢東の言葉によっても、当時の東北は、新疆とともに、ソ連のもとでの「二つの
植民地」（毛沢東「成都会議での講話」八一九五八年三月）、『毛沢東思想萬歳』、一九六
九年八月）であったことからして、党中央とは独自にスターリンと交渉をもっていた高崗とスタ
ーリンないしはソ連との特殊な関係が従来から注目されてはいたのであるが、最近にいたって、
高崗事件の背景を成した中ソ関係とこの事件との関連を示唆する材料が出はじめ、こうして高崗
事件は、中ソ対立の現況からしても、きわめて今日的な意味を帯びて再検討を迫られているので
ある。

そして、まず第一には、これまでのわれわれの研究（「朝鮮戦争をめぐる中ソ間の秘められた
対立」、第一部「中ソ対立の歴史的背景」、参照）からも明らかのように、東北が、モンゴル、
新疆などとともに、中ソの利害対立の磁場であり、勢力角逐の舞台であったことからして、東北

というその舞台を「独立王国」化しようとした高岡事件も、背景としての対立抗争という当時の国際環境と無関係ではあり得ないであろうという問題が設定できる。

第二には、今日の中国では周知のとおり、高岡、饒漱石らを反党・反革命分子として激しく糾弾しているが、ソ連やモンゴル人民共和国では、とくに最近、彼らを「国際主義者」として高く評価していることである。ここにも、高岡事件の今日的な意味があらう。

第三には、最近の毛沢東未公開資料やフルシチョフの回想録によって、数多くの状況証拠に新たな照明が与えられ、事件の背景と輪郭がより鮮明になったことである。たとえば毛沢東は、「スターリンは高岡を大変ほめあげて、わざわざ車を一台贈ったし、高岡は毎年かかさず『八・一五』にはスターリンに祝賀電報を打ったものだ」などと語っており（前掲、「成都会議での講話」）、フルシチョフは、「中国共産党内の雰囲気に関する情報の多くは、高岡からわれわれにもたらされた。当時彼は中共政治局の代表者であると同時に、満州の代表者であったが、満州で彼はわが代表たちと親密な関係にあった」と回想している（ストローブ・タルボット編『フルシチョフ最後の遺言』）。

ところで、右のような背景をもつ高岡事件についての今日の国際的評価についてここでふれて

おこう。

いうまでもなく、中国共産党は、先の「高崗・饒漱石の反党同盟にかんする決議」以来、一貫して高崗、饒漱石らを激しく非難しており、この事件を建国後最初の「階級闘争」、「第一回目の大闘争」だと位置づけられている。高崗事件の処理に主役を演じた鄧小平は、一九四五年の中国共産党七全大会以来十一年ぶりに開かれた一九五六年九月の中国共産党八全大会の「党規約改正についての報告」で、「第七回大会から第八回大会までのあいだの、もっとも重大な党内闘争は高崗・饒漱石の反党同盟にたいする闘争でした」（『中国共産党第八回全国代表大会文献集』第一巻）と述べていたが、やがて、一九五九年に彭徳懐らが失脚すると、彭徳懐事件と高崗事件との関連が指摘され、次いで文化大革命以降は、高崗、彭徳懐、劉少奇らが一線で結ばれるにいたったのである。

一九五九年八月十六日付の中国共産党第八期八中全会「彭徳懐を頭とする反党集団にかんする決議（摘要）」^{*}によると、彭徳懐、黄克誠、張聞天、周小舟らいわゆる彭徳懐グループの活動は、「高崗・饒漱石反党同盟事件の延長であり、発展である。現在すでに明らかにされたところによると、彭徳懐と黄克誠はやくから高崗と反党同盟を結び、しかも、この同盟の重要なメンバー

であった。張聞天も高崗のセクト活動に参加していた」（『人民日報』一九六七年八月十六日）
ということになっている。^{**}

* この決議の「摘要」は抜萃が公表されたのは、決議から八年後の文化大革命高揚期である一九六七年八月十六日であった。

** 彭徳懐らと高崗らとの結合が具体的にどのようなものであったのかは、必ずしも明白でないが、文化大革命期にあらわれた紅衛兵資料によると、「抗米援朝の勝利後、裏切り者の彭は、『抗米援朝の功績は二人のあばたに帰せられる』、半分は高あばた（高崗）、半分は後勤の洪あばた（洪学智）などとデタラメをいった。洪学智は彭徳懐事件に連坐して失脚した人民解放軍総後勤部部长で中共中央委員候補であった——引用者。一九五一年、裏切り者の彭は、聶総参謀部長と総参謀部の工作に非常に不満で、彼は中央と主席が高崗を総参謀部で工作させるよう人づてに要求した」（清華大学井岡山兵团『打倒大陰謀家、大野心家、大軍閥彭徳懐へ彭徳懐材料彙編』八一—一九六七年十一月、丁望主編『中共文化大革命資料彙編』第三卷へ彭徳懐問題專輯）といわれている。

やがて、文化大革命が高揚しようとする直前に迎えた中国共産党創立四十五周年記念の『人民日報』社説「毛沢東思想万歳」は、「建国後十六年来、毛沢東同志をはじめとする党中央のマルクス・レーニン主義的指導部は、反党修正主義グループと三回にわたる大きな闘争をすすめてきた。第一回目の大きな闘争は、高崗、饒漱石の反党同盟との闘争である。……毛沢東同志をはじめ

めとする党中央は、これらの反革命分子と断固とした闘争をすすめた。一九五四年の党の七期四中全会と一九五五年の党の代表者会議で、この反党同盟は徹底的に暴露され、粉碎された」(『人民日報』一九六六年七月一日)と述べた。

一九六九年四月の中国共産党九大大会では、政治報告をおこなった林彪が、「中国共産党の歴史は、ほかでもなく、毛主席のマルクス・レーニン主義路線と、党内の右翼と『左』翼の日和見主義路線との闘争の歴史である。毛主席の指導のもとに、わが党は、陳独秀の右翼日和見主義路線のうちかち、瞿秋白、李立三の『左』翼日和見主義路線のうちかち、王明の、初めは『左』翼、後は右翼の日和見主義路線のうちかち、張国燾の、赤軍を分裂させる路線のうちかち、彭徳懐、高崗、饒漱石らの右翼日和見主義の反党同盟のうちかち、さらに、長期にわたる闘争を経て、劉少奇の反革命修正主義路線を粉碎した」(一九六九年四月一日)と強調した。

次いで一九七一年七月の中国共産党創立五十周年記念には、『人民日報』・『紅旗』・『解放軍報』三誌紙共同社説「中国共産党五十周年を記念する」が、半世紀の党内闘争史を顧みながら、毛・林体制をたたえつつ、「社会主義革命は、資本主義を葬る闘争であり、全国の勤労人民から歓呼されたが、劉少奇一味の狂気じみた破壊をも受けた。彭徳懐、高崗、饒漱石らは反党連盟を

結んで、中央を分裂させ、プロレタリア階級独裁をくつがえそうとした」（『人民日報』一九七一年七月一日）として、劉少奇との関連が強調されたのである。

このような経緯のうちに林彪異変が生じたのであるが、林彪を断罪した一九七三年八月の中国共産党十全大会では、政治報告をおこなった周恩来が、「林彪反党集団」を激しく非難しつつ、「党内の二つの路線の闘争は長期にわたって存在し、これから先も十回、二十回、三十回と起ころであらうし、林彪のような人物があらわれ、王明、劉少奇、彭德懐、高崗のような人物があらわれるであらう」（一九七三年八月二十四日）と語ったのであった。

以上のように、きわめて印象深い曲折を経ながらも、中国共産党において、高崗事件は一貫して激しく糾弾されてきたのであった。

一方、このような中国内部での評価にたいして、ソ連の側は、中ソ対立の激化とともに高崗事件についても積極的に言及しはじめ、むしろ高崗の立場を大胆に擁護している。

たとえば、V・グルーニンは、「高崗・饒漱石事件の真相」（邦訳、『週刊中国事情研究』一九七四年三月十八日号）のなかで、「この事件は、毛沢東派が党内の健全な国際主義勢力に攻撃を加えた最初の大規模な政治行動であった」と述べ、高崗その人についても、「高崗は東北で献

身的に活動していたソ連の政治、経済、軍事、技術の専門家たちと密接に協力した。高岡は高い地位を保持しつつ、科学的社会主義建設のため、中ソ友好関係の強化のための積極的活動に直接参加した」と追想して、先のフルシチョフの回想を裏付けるとともに、こうして高岡を讃えて、中ソ関係史のなかでの高岡の位置を暗示しているのである。

中共中央からは反党分子として激しく非難される高岡を「国際主義者」だと評価する見方は、モンゴル人民共和国からも提起されている。内モンゴルを中国が自己の版図に加えて支配しているとするモンゴル人たちは、高岡がかつて一九四八年八月三日に内モンゴルの党活動にかんじておこなった演説「内モンゴル幹部会議での講話」（『人民日報』一九四八年八月三日、『東北日報』一九四八年十二月十二日）に言及し、高岡が「内モンゴルの単一の自治政府の形成」にふれ、中国共産党主導型の内モンゴル統治に反対したことを高く評価し、こうした高岡の姿勢にもかかわらず、「しばらくすると、中国共産党内で支配的地位を占めるにいたった毛沢東らの小ブルジョアの民族主義派」が「真の国際主義者」としての高岡を打倒したとみなしている（D・バザルガリド「大漢的排外主義と内蒙古の運命」、邦訳、『極東の諸問題』第三卷第二号）。

* 一九四八年八月の「内モンゴル幹部会議での講話」は、「高崗式の国際主義」の演説として注目された。当時、スターリンとコミンフォルムがユーゴスラヴィアのチトーを民族主義者として激しく批判していたが、その批判はまた毛沢東にも向けられるべき性質のものであっただけに、内モンゴルをソ連の影響下に中国から離脱させて外モンゴルと一様の道を歩むことを示唆した「高崗式の国際主義」の立場が注目され、有名な小冊子『国際主義と民族主義』のなかに加えられて、中国共産党員の必読文件の一つになった、とする見方がある（田豈「高、饒反黨聯盟始末」、史家麟編『中共高、饒事件面面觀』八一九五五年、香港、所収）。

以上で見えてきたような様々な評価のなかに、かえって高崗事件の今日的な意味が浮き彫りされているといえないだろうか。

二、「反党同盟」の摘発とその形成

高崗事件が摘発されたのは、公式には一九五四年二月の中国共産党七期四十全会前後、だとされている（前掲、「高崗・饒漱石の反党同盟にかんする決議」。七期四十全会は、五四年二月六日

から十日まで北京で開催されたが、この中央委員会総会は、「党の団結の問題」を主要な議題とし、「党中央政治局と毛沢東同志の委託を受けて」劉少奇が中央政治局の報告をおこない、全会一致で「党の団結強化にかんする決議」を採択したのであった。同決議は「党内の一部の幹部は、：：甚だしきは、自己の所管の地域や部署を個人の資産ないしは独立王国とみなしている」と指摘し、さらに、「故意に党の団結を破壊して党と対抗し、頑固に誤りを改めず、甚だしきは党内でセクト活動、分裂活動その他の危害活動をおこなうそれらの分子にたいしては、党は必ず無情な闘争をおこない、厳格な制裁、場合によっては必要な時期に彼らを党から駆逐するであろう」（『人民日報』一九五四年二月十八日の「四中全会公報」）と述べて、事態の深刻な側面を暗示したのである。この決議はもともと、毛沢東が五三年十二月二十四日の党中央政治局会議でおこなった、「党の団結強化にかんする決議」のための建、議、に基、づくものとされておき、従って、高崗、饒漱石らが行動の自由を失い、職務を停止されるなど実際上の摘発を受けたのは一九五四年初頭であったと推測されている（高崗の公式な場面への最後の登場は五四年一月二十日に北京の懐仁堂でおこなわれたレーニン逝去三十周年記念大会であった。なお、これら四中全会とその前後の状況について詳しくは、許冠三「『高饒反黨聯盟』原委へ下▽」、『明報月刊』へ香港▽一

九六六年二月号、参照)。つまり。一九五四年一月下旬から二月初旬の時期に高崗らは摘発され、事件は第二段階の肅清の過程へと進んでいったと思われ、四中全会の決議を経て翌五五年三月三十一日に党全国代表会議で鄧小平の主導下に「高崗・饒漱石の反党同盟にかんする決議」が採決されて高崗の「自殺」を含むこの事件の処理が公表されるまで、約一年間の審理と猶余の期間をおき、党内の動揺を防ぎつつ、この事件は終結したのであった。

ところで、劉少奇が主導した四中全会に毛沢東は欠席している。これらの点についての分析を含めて、ソ連側の見方には、やはり注目に値するものがある。V・グルーニンは、こう述べている。「一九五四年二月の四中全会は、毛の指示によって作製された劉少奇報告をもとにして、高崗と饒漱石は『敵の手先』となって党内に『分裂と分派活動をもたらし多くの分派集団をつくりだそうと試みた』と断罪された。まもなくこの敵はソ連を意味していることがわかった。毛一派は高崗を『ソビエトの手先』^{*}と呼び、彼が党の『分裂』を策したと非難した。

×

×

×

四中全会では毛は手を出さず高崗の処理は劉少奇に委ねる態度をとった。だが劉少奇は毛沢東が望んだような手荒な処置をとらず、四中全会はたんに『嚴重警告』を発したに過ぎなかった。

一九五五年の中共全国代表会議では、『高崗事件』は中央委書記の鄧小平に委ねられた。彼はその任務を十分に果たした。高崗に政治的死刑を言い渡したのも彼であった。このことは鄧のその後の政治経歴に重要な役割りを課した。やがて彼は中央委政治局員に互選され、その後一年少しで中央委総書記に昇進した。『高崗事件』で果たした彼の功績が『文化大革命』後の免罪にも大きくものをいったと考えられる」（前掲、「高崗・饒漱石事件の真相」）。

* フルシチョフはその回想録で、北京でのあるパーティーのことをこう述べている。「そこに出席していた多数の若者たちは酒に酔って、わが代表たちに向かって『君たちの飼犬高崗』と怒りの言葉を吐きはじめた。このとき高崗はまだ中共の政治局の一員であったが、すでに危険な状態にあった」（前掲、『フルシチョフ最後の遺言』）。なお、『フルシチョフ最後の遺言』はソ連では解禁されていないものであるのに、このようにソ連側の今日の見解と一致していることは、たとえこの回想録にフルシチョフの記憶の誤まりなどからくる部分的な齟齬があったにせよ、逆にこの回想録の信憑性とリアリティーを著しく高め、同時に史料的位置を高めるものである。

以上の叙述は、高崗事件のリアリティーに迫る内容もち、この事件の概容を端的に物語っていると思われる、また、後述するように、本来は毛沢東と親密な関係にあったと思われる高崗の摘発を当初は劉少奇に、のちには鄧小平に委ねざるを得なかった毛沢東の立場や、文化大革命以後、

高岡事件との関連でも一貫した態度をとらなかつたとしてその「反党修正主義」を糾弾されることになった劉少奇の四中全会での役割りなどについて、かなりの確に事態の核心を突いているように思われる。

ところで、高岡事件が摘発され、党の団結強化が唱えられた背景に、スターリン死後のソ連で摘発されたベリア事件の影響とその衝撃が存在していたと思われることも見落すべきではなからう。すでにソ連国内で摘発されたベリアにたいしては、毛沢東が五三年十二月二十四日に党中央政治局会議で先の建議をおこなった同じ日に、モスクワの最高法院はベリアを正式に断罪したのであった。

さて次に、「高岡・饒漱石反党同盟」とは、どのようなプロセスを経て形成され、どのような目的をもっていたのかを、まず中国共産党の公式の罪状によって顧みてみよう。「高岡・饒漱石の反党同盟にかんする決議」によれば、それは次のとおりである。「一九四九年以来、高岡は党と国家の指導権奪取を目的として陰謀活動を進めてきた。：：東北地区を高岡の独立王国たらしめようとした。高岡が一九五三年に中央のポストに移されて以後、彼の反党活動は一段と狂気じみたものになった。：：極端にでたらめな一種の『理論』を鼓吹し、わが党は二つから成り、一

つはいわゆる『根拠地と軍隊の党』で、もう一つはいわゆる『白区の党』であって、党は軍隊がつくったものであり、彼こそいわゆる『根拠地と軍隊の党』の代表者であり、かつ当然彼が主要な権力を掌握すべきだと自認し、かくて、党中央と政府はすべて彼の計画どおりに改組すべきであり、現時点においては彼自身が党中央の総書記あるいは副主席を担任し、かつ國務院総理を担任すべきであるというのである。……

饒漱石は、高崗の反党陰謀活動の主要な同盟者である。……饒漱石は一九四三年から一九五三年までの十年間に、何回も権力を奪取するため党内で恥ずべきべてん手段を行使した。……一九五三年に彼が中央のポストに移されてから後には、高崗の中央権力奪取の活動が成功するであろうと考え、その結果、高崗と反党の同盟を形成し、中央組織部長のポストを利用して中央の指導的同志に反対することを目的とする闘争を發動し、党を分裂させる活動を積極的にすすめた。……敵は必然的に百方手をつくしてわが党を破壊しようとしており、最大の希望を中国共産党の分裂と墮落変質に托している。……高崗・饒漱石らの一派は、まさにこうした情勢のもとで反党同盟を結成し、党の中央委員会、まず第一に中央政治局に進攻をおこない、毛沢東同志を首領とする、長期の試練を経た党中央の指導中枢部を顛覆し、それを手がかりとして党と国家の指導権奪

取を容易にしようとしたのである。∴彼らの唯一の綱領は、陰謀的手段をもって党と国家の最高権力を奪取するということであった」（『人民日報』一九五五年四月五日）。

以上のような経緯は、事件の輪郭をそれなりに実態的に伝えていられると思われるが、「敵」がこの場合、ソ連であったかどうかはさておいて、ある点では一九七一年九月の林彪異変以後、林彪の「陰謀」だとされた問題と相通する内容であることに気づかざるを得ない。もとより、高崗、饒漱石は、ともに中国共産党の首脳であったばかりか、「かつ中国二大工業地帯——東北および華東における最高指導者でもあった」（V・グルーニン）がゆえに、事態は深刻であった。

ここで、高崗、饒漱石の個人的な活動歴を見るならば、高崗は、中国革命の初期の段階における北伐失敗以後、陝西紅軍の最高指導者・劉志丹とともに陝西省北部で農民運動を始め、のちの紅軍主力の長征中は、はやくから陝西省北部にソヴェトを組織し、陝北の党と紅軍（紅二十六軍）の基礎をつくったのであった。こうして高崗は陝甘寧辺区を中心に吳起鎮や瓦窰堡の根拠地を死守して長征後の紅軍を迎え入れることに大きな貢献をなした。抗日戦争後の国民党軍との内戦に際しては、東北および西北区の指導者として数多くの功績を残し、中華人民共和国建国に際しては、六名の中央人民政府副主席のなかで朱徳、劉少奇とともに中国共産党を代表する副主席の一

人となり、東北行政委員会主席、人民革命軍事委員会副主席、党中央政治局委員などを兼務し、五二年十一月からは国家計画委員会主席でもあったのである。このような高崗の当時の活躍は目を見張るばかりであって、『人民日報』はしばしば高崗の講話や活動ぶりを報道した。高崗の経歴のなかでは、彼が陝北を地盤にした土着派の共産主義者であり、陝北の党と紅軍（紅二十六軍）はもともと党中央にたいして、つねに自主独立的ないしは反中央的であったといわれ、「中央が派遣した幹部や代表との闘争を通じ、中央の指示や彼らの決定を拒むことを通じて、はじめて紅二十六軍は滅びることなく、『逃亡』と『流浪』のなかで強大になった」（許冠三「『高饒反黨聯盟』原委へ上ⅴ」、『明報月刊』一九六六年二月号）といわれてきたことに注目すべきであろう。

饒漱石は、上海大学卒業後、米ソ仏に留学したインテリ黨員であった。帰国後、延安に入り、抗日戦争中は劉少奇の下に華中局の宣伝部長、新四軍政治委員などを歴任したのち、東北人民解放軍政治委員、華東行政委員会主席を務めたのち党中央組織部長になった党の有力幹部（党中央委員）であった。

高崗事件が摘発されてからは、七期四中全会文献の学習会議が各党中央地方局でおこなわれ、

五四年六月には六つの大行政区政府が廃止され、同時に党中央地方局も、その後数カ月の間に順次廃止されて地方分権化に終止符が打たれたのである。この過程で、上級幹部としては、張秀山（東北局第二書記兼秘書長、東北人民政府監察委员会主任）、張明遠（東北局第三書記、東北行政委員会副主席）、陳伯村（東北局組織部副次長兼東北人民政府監察委員会副主任）、郭峯（東北局組織部副部長兼東北人民政府人事部長）、趙德尊（東北局農村工作部長）、馬洪（東北局副秘書長、國家計畫委員會委員）の六名が高崗の部下として、向明（山東分局第一書記、山東人民政府第一副主席）が饒漱石の部下として追放された。さらにこの事件に連坐した東北局、華東局の中下級幹部の数は枚挙にいとまがないともいわれている。こうして、高崗事件は処理されたが、高崗、饒漱石以下、これら一連の幹部にほぼ共通な特徴は、彼らがいれば地方幹部であり、毛沢東直系の党幹部ではなく、しかも長征に参加した幹部でもないことであろう。（許冠三、前掲、

許冠三論文、参照）

三、事件の真相と性格

中国共産党内闘争は、いわゆる路線闘争としての性格を有すると同時に、つねに党最高指導層内部の権力闘争としての側面を内在させている。高崗事件も、その例外ではなからうが、この事件を指導者間の闘争として見た場合、それをどのように描くべきかについては諸説が存在する。

そうしたなかで注目されるのは、いずれも劉少奇が高崗、饒漱石の直接的な抗争の対象であったとする見方がほぼ共通的に存在することであろう。この点は、四中全会で劉少奇が主役をつとめ、その「罪状」によると高崗は「党中央の総書記あるいは副主席を担任し、かつ國務院総理を担任すべきである」と主張したと示されていることに示されるように、高崗が No.2 の地位を求めたらしいことから推測され得るところである。

このような前提のもとで、まず第一に顕著な見方は、高崗、饒漱石らと劉少奇および周恩來の対立と見るものであり、たとえばピーター・タンは、高崗が「根拠地と軍隊の党」と「白区の党」を対抗させようとしたことに注目して、対象は毛沢東ではなく「白区の党」の代表者、劉少奇で

あり、周恩来もその対象になり得たとみなしている（Peter S.H. Tang, *Power Struggle in the Chinese CP: The Kao-Jao Purge, Problems of Communism*, Nov.-DEC. 1955）。『風暴十年』の著者、周鯨文も、劉少奇と周恩来が対象であったとして、こう述べている。「毛沢東が長征の末、尾羽打ちからし疲れきった七千余の紅軍をひきいて、延安にたどりついたとき、これを收容して生きのびさせたのが高崗である。彼こそ功臣であった。中共が天下を取ると毛沢東は彼を中央人民政府副主席兼東北人民政府主席に任じたのは、昔でいえば、まさに封侯拜相のたぐいであつた。だが高崗にしてみれば、党内では劉少奇に牽制され、行政では周恩来に牽制されていると感じた。……この闘争で、彼は『君側の奸を清める』と唱え、毛沢東反對を口にしなかつた。ねらうところは、劉少奇と周恩来だったのである」（『風暴十年』）。この点は『中共の十大問題』の著者、金雄白もほぼ同意見であり、「高饒聯盟の目的は、中共の指導権を奪い、劉少奇を攻撃するとともに、さらに周恩来に代つて國務院総理の地位を要求することだった。その背後の支持者は、ソ連のスターリンであつた」と述べている（『中共の十大問題』）。このような事情から、毛沢東の四中全会欠席について周鯨文は、「毛沢東は故意に故郷に帰り、そこで春節を送ると称して、傍觀者の立場をよそおつた」（周鯨文『風暴十年』）と語

っている。毛沢東の四中全会欠席については、高崗が毛沢東ら長紅の主力部隊を陝北で迎え入れてからの両者の「親密な戦友」としての関係を指摘する見方もあり（丁天立「中共黨争の真相——分析、高崗、饒漱石『反黨聯盟』案」、前掲『中共高、饒事件面面觀』所収）、この意見は当然、劉少奇を事件の一方の主役とみなし、この事件を劉少奇の完全な勝利に帰した闘争だとみなしている。

この問題につき、高崗事件についての力作を発表した田豈は、鋭くうがった見方をしている。田豈によれば、「根拠地と軍隊の党」と「白区の党」という問題から、理論的には劉少奇と周恩来が対象になるが、毛沢東、劉少奇、周恩来、朱徳、高崗という当時の党中央書記処の五人の書記の第五位にあった高崗にとって、「周恩来は朱徳と同様にどうでもよい人物であり、真の闘争目標にはなり得ず、目標は劉少奇であった」（前掲、田豈「高、饒『反黨聯盟』始末」）としながら、毛沢東も、表面上無関係をよそおい、他人にそのように思いこませながら、実際には劉少奇を表面に出しつつ、この事件の摘発に関与していたのであり、その毛沢東が四中全会を休んだのは（当時は「休暇」と報ぜられた）、高崗事件の国際的背景を考慮し、「彼へ毛沢東——引用者√自身が国際的に衝突するのを避けるためであった」と推測している（前掲、田豈論文）。四

中全会の劉少奇報告が、前年十二月の中共中央政治局會議における毛沢東の建議に基づくものであったことを顧み、高崗事件の背景にあった中ソ関係を今日の時点で考えたとき、この見方はきわめて説得力の強いものだといわねばならない。

さて、以上のような見方とそのヴァリエーションにたいして、第二の見方は、劉少奇および鄧小平との角逐に力点を置くものである。すでに見たように、高崗事件の処理過程とその後の党内リーダーシップの推移（劉少奇、鄧小平のほかには、特務の責任者としての康生の地位も上昇した）からすれば、この見方はきわめて妥当であり、ソ連の見方を代表するV・グルーニンもこのような立場にある。V・グルーニンの場合は、すでに述べたように、この事件は毛沢東が劉少奇に、そして最終的には鄧小平に手を下させた事件だという基本前提に立っている。さらに、高崗事件について詳細な論文を書いている許冠三も、鄧小平にたいする高崗や饒漱石の不満は、鄧小平が当時、憲法起草委員会、選挙法起草委員会、中央選挙委員会の三つの委員会委員を兼務し、實際上、中央選挙委員会の事務を主持していたことにあるとして、抗日戦争や戦後の国共内戦を通じ、鄧小平は高崗や饒漱石といつも一緒だった人物だから、論功行賞でも鄧小平が彼らの上位につくべきではないと高崗らが考えていたことを指摘する（前掲、許冠三「『高饒反黨聯盟』

原委へ下↓)。

ところで、当の毛沢東自身はこの事件にかんし、実際、どのような位置にあったのであろうか。この点を知る材料は少ないが、毛沢東が高崗事件をどのように受けとめているかを見ることによつてある程度の判断ができよう。

毛沢東は、事件処理後の一九五六年四月、「中央政治局拡大会議での講話」でこの事件に言及し、「四中全会は開くべきであつたし、決議は大変必要なことであつた。そうでなければ、高崗をもう一年のさばらせることになり、それは想像することもできないおそるべきことであつた」(『毛沢東思想万歳』一九六九年八月)と告白している。毛沢東にとって「想像することもできないおそるべきこと」が具体的になにを意味するのか、この告白だけでは明らかでないが、事件にたいする毛沢東の態度を知ることができよう。やがて一九五八年三月の「成都会議での講話」では、すでに引用したように、スターリンと高崗の親密な関係を例示し、「高崗・饒漱石事件は、震度八の地震」だと語っている(『毛沢東思想万歳』)。そして、一九五九年八月の彭徳懐摘発に際しては、「この党の主要な構成員が、もともと高崗の陰謀的な反党集団の重要メンバーであつたことこそ、その証明の一つである」(『一つの批評』)と述べて、彭徳懐事件を高崗事件と

結びつけるパターンを示した。両者を結びつける共通項が「親ソ派」ということであろうことは疑いない。

ともかく、このように見てくると、高崗らにとって直接の対象は劉少奇、周恩来もしくは鄧小平であったにせよ、毛沢東によって高崗摘発はすでに不可避の重要な課題になっていたように思われる。

以上の諸状況を、今日の時点で再検討しつつ総合するならば、高崗事件は、党最高指導層のあいだの権力闘争としては、背景的には毛沢東を頂点とし、劉少奇、周恩来、鄧小平を擁する党中央の党官僚層と高崗らの地方に基盤をもって立てこもる指導者たちとの闘争であり、直接的には、劉少奇、鄧小平がこの闘争の前面に立ったのだといえよう。しかも、この権力闘争には、すでに見たように高崗らの背景にスターリンとソ連共産党が存在するという国際的背景があった。同時にこの権力闘争は、東北と華東の二大工業地域をその舞台とした中央と地方との闘争であったという性格を帯び、「またその歴史的要因は、中共の伝統的な革命根拠地政策ないし地方ブロック政策と、政権確立後の中央集権化との不可避的な衝突にあったともいえよう」（唐土洋三「党の現勢」、アジア政経学会編『中国政治経済綜覧』昭和三十五年度版）。そしてとくに、この事件

の主要な舞台が東北であったことは、この事件を重大なものとし、かつ複雑化したのであった。もとより、ジョン・ギッチングスも述べているように、事件の「本当の理由」は、これらの諸側面のほか、中央委内部における個人的ねたみや個人的ライバル関係といった未知の要因を加えたところにあるのかもしれない」（ジョン・ギッチングス『中共軍の役割り』△下▽）といえよう*。

* なお、中国共産党の党内闘争にしばしば大きな意味をもつ軍の問題を、ここでは検討していないが、高岡事件にかんするかぎりは、「結局、軍隊は『高岡』事件にかんしては重要な（もしくは識別可能な）役割りを演じなかった、と考えてよいだろう」というジョン・ギッチングスの指摘（『中共軍の役割り』△下▽）が正当であろう。この点について田豈は、「共産党権力の来源は、まさに高岡自身が述べているように一般には『軍隊がつくったもの』である。だが彼には軍隊がなかった。それは、林彪が部隊を率いて入関したとき、東北に残っていたのは、彼自身の吉黒軍区の部隊だけであり、その軍区部隊は地方的な性格の部隊であり、正規軍の部隊に次ぐ性格のものであった」（前掲、田豈論）と述べている。

ともかく、高岡事件は以上のような内容と性格を有していたのであるが、では次に当時の東北を中心とした権力の地方化の問題を考えてみよう。

四、権力の地方化と高崗

中国革命は、周知のように、「農村」から「都市」を包囲する根拠地革命によって地方権力を樹立し、やがて中央権力を打ち立ててゆくという過程をたどった。このような革命の歴史的経緯は、中央政権樹立後も、全国を大行政区に分割して統治するという体制を形成せしめるところとなった（一九四九年十二月十六日付「大行政区人民政府委員会組織通則」によって全国が六つの大行政区に分割された。このような状況のなかで、高崗は、初めは陝西を地盤とし、建国後は東北を地盤として出現した代表的な土着政治家ないしは地方実力者であった。この点に注目した唐土洋三論文（前掲）は、「彼を最大の地方実力者たらしめた主たる要因は、東北の軍事的・政治的・経済的立地条件にあったといえよう。東北は第二次大戦末期にソ連軍に占領され、ソ連の直接援護下に革命と建設を推進し得た。さらに朝鮮戦争中は前線における中共軍の直接的な補給基地となった。また東北は元来中国重工業の最大基地であった」と述べている。また、許俊は「高崗事件研究」と題する論文のなかで、東北の特殊性を次の三点に要約している。（一）解放が比較的

早い地域であったため土地改革と工業建設の面で、全体として先進的な地位に立っていた。(二)ソ連と隣接し、しかも中国長春鉄道と旅順・大連の関係で、ソ連とはおのずからさらに緊密な関係にあった。(三)工業が比較的発達し、経済上一区域となり得るので、とくに中央をたよる必要がなく、しかも中央の経済力を支えていた(前掲、『中共高・饒事件面面観』)。そして、このような事情から東北は必然的に別格的な地位にあり、特別な扱いを受けていたのであるが、「高崗が東北の軍政を指導するようになってから、『独立王国』の形態がはっきり現われ始めた」(金雄白『中共の十大問題』)のである。

こうした状況のなかで、高崗は公式な「罪状」によると「一九四九年以来、……陰謀活動を進めてきた」(前掲、『高崗・饒漱石の反党同盟にかんする決議』)といわれている。だが、はやくも一九四八年三月、すでに東北の指導者となった高崗は、「内モンゴル幹部会議での講話」(前掲)で、内モンゴルを中共中央の支配から「自主独立」させ、外モンゴルとともにソ連の側に向くべきことを主張したばかりか、建国直前の翌四九年七月には、「中国東北人民政府」代表という資格で独自の通商使節団をみずから引率してモスクワを訪れ、東北のみに適用される「東北とソ連とのあいだの相互商品交換協定」(新華社一九四九年八月一日瀋陽電)前掲、許俊論文)を

スターリンとのあいだで中共中央とは無関係に締結したのであった*。

* この貿易協定は、ソ連の最初の公開の援助を意味し、スターリンは工業設備、自動車、石油、綿製品、紙類、医療器材、薬品などを東北人民政府に供給することになったのであるが、この協定は『人民日報』においては公式に発表されず、この協定についての『東北日報』社説が四九年八月九日付『人民日報』に転載されたにすぎない。ソ連側は七月三十一日付『イズベスチヤ』が協定内容を報道した。なお、その後の毛沢東・スターリン会談の結果、中ソ両国間に正式な貿易協定（一九五〇年四月十九日調印）ができてからは、スターリンが単独に東北を援助する従来の方針は改められ、「さき高崗と協定調印した援助計画の各項目を中共に対する援助の総項目中に編入した」（外務省アジア局中国課『中・ソ関係の発展（一九四九—一九五八年）』、一九五八年八月）といわれている。

このような独自性を示していた高崗は、四九年九月八日の東北幹部会議での講演で、「東北全党と全人民の中心任務は経済建設であり、他のすべての工作は経済建設をうまくやるために奉仕するものである」と述べ、党内の一部の幹部は過去の荣誉にばかりしがみついているという挑発的な意見を表明したのちに、「東北を全国の工業基地に建設すること、これこそわれわれの偉大で光荣ある任務である」と強調した（高崗「荣誉是屬於誰的？——一九四九年九月八日在東北幹

部会議上の講演」、香港・大公報出版『学習』第一輯）。

このように高崗指導下の東北の建設が、すでにまっしぐらに「独立王国」の強化に向いつつあるなかで四九年十月、中華人民共和国の樹立を迎えたのであったが、建国後、毛沢東がみずから代表団長となって訪ソし、スターリンとの論争の末とはいえ、五〇年二月に中ソ友好同盟条約が締結されたことは、高崗にとって、最初の打撃であった。中ソ友好同盟条約の締結により、中ソの一枚岩的団結が強調され、中国の側でも、ソ連讚美のキャンペーンが進められたことは、スターリンの高崗への支持が「公開のものから秘密のものへと転化」せざるを得なくなったことによつて、高崗には状況は必ずしも有利ではなくなりつつあった。このような状況のなかで五〇年六月、朝鮮戦争が勃発したのである。この抗米援朝戦争は東北を基地として遂行され、東北はその直接の後方となった。そのことは、高崗の独立自主の風潮をさらに促進し、国営企業にたいしても高崗が統一的な指導をおこなうようになったのである（「高崗同志在東北局城市工作會議上の總結」、『東北日報』一九五一年六月二十五日。前掲、許俊論文）。このような状況に対処するため、毛沢東は、はやくも一九五〇年末、第一に、その腹心の部隊を大量に東北へ導入し、「一面で『援朝』の基地とし、他面では高崗の軍事力への圧迫作用を起した」（前掲、田豈論文）と

いわれている。

第二には、党の問題として、東北の党の組織と財政面を従来から主管していた陳雲、東北第一副主席の李富春、李富春と関係の深い林楓らの幹部を通じて高崗を東北の党・軍・政の三方面から浮かせようとした（同前）ともいわれる。

第三には、高崗の力が北朝鮮との諸関係にまで及ばぬように、林彪の第四野戦軍の系統を用いて高崗を抑え、一九五二年下半期には、吉林軍区司令員として高崗と関係の深かった倪志亮・駐北朝鮮中国大使が突然失踪するにいたったのであった（同前）。

一九五二年になると毛沢東は、中国本土と共通ではなかった「東北幣」を廃して人民幣で統一し、八月には地方の行政を統一するというスローガンのもとで「東北人民政府」を廃止し、同年十一月には六大行政区も廃止されたが（一九五二年十一月十五日付『中央人民政府委員會關於改變大行政區人民政府（軍政委員會）機構與任務的決定』）、これらの措置は、すべて高崗を対象にしたものであったともいわれている（前掲、許冠三論文）。こうして東北の「独立王国」は重大な転機を迎え、高崗は右の決定を見た中央人民政府委員会第十九次会議で、中央人民政府国家計画委员会主任に任命されたのである。許冠三も指摘するようにこの人事は「高崗を彼の『独立

王国』から引き離すためであった」といえようが、こうして事件は新しい段階へと入り、その舞台の中心は瀋陽から北京へと移っていったのである。^{*}

* 金雄白は、高岡の北京移動について、「高岡は新しい任地の北京に赴くことを承知しなかった。だが一九五三年スターリンが他界したので：、高岡は後楯を失い、つい在一九五三年七月北京に赴いて国家計画委員会主席の職務についた」（『中共の十大問題』）と述べている。

五、ソ連にとっての東北

前節で見たように、高岡にとって東北は、彼の政治的成長の地盤であり、資産であった。このような東北を中国の工業基地、経済建設センターにしようとする高岡の意欲（前掲の東北幹部会議での講演、参照）は、並々ならぬものであり、以後このような主張は、ソ連の援助による重工業中心の第一次五カ年計画の重点基地こそ東北であるべきだという認識となって、高岡や林楓（東北行政委員会副主席）ら東北の指導者によってしばしば表明された。一方、東北のこのよう

な特殊な位置が高崗の政治的存在を大きなものにしたのである。こうして、東北において、党政・軍・民の全権を手中にした高崗にたいし、「瀋陽の大衆集会では、『高崗萬歳』のスローガンが出現したが、もはやそれは奇異ではなかった」（余逸楽「東北人説高崗」、『明報月刊』一九六六年二月号）のである。

このような高崗の突出した存在が毛沢東ら党中央にとって容易ならぬ脅威であったのは、その舞台が中国の国家建設の根拠地でもある東北であったからであるが、さらに、こうした東北特殊化状況のなかに存在する高崗がスターリンの支持を得ていたからであった。

ところで、隣接地域へのスターリンのソ連の対外接触、対外進出の方法は一般に、東欧諸国にたいして見られるように、まず第一に軍事占領、第二には現政権を利用しつつその権威を奪うこと、第三には内戦や局地戦を利用しつつ相手国共産党を支援するという戦略・戦術（マッキントッシュ『ソ連外交政策の戦略と戦術』）をとってきたといえるが、この相手国共産党への支援という点では、土着の共産主義勢力が増強されることを欲せず、東欧の例にも見られるように、しばしば「モスコヴィッチ」（ソ連仕込みの親ソ派のリーダー）を送りこんだのであった。「スターリンは、中国の東北においても同様の政策をとったようである。ここでは『モスコヴィッチ』

として送り込まれた主要人物は、李立三と周保中であつた」（『中華人民共和国の成立をめぐる中ソ関係——中ソ同盟とその動態——』）といわれている。そして、いわゆる「李立三路線」で知られる李立三は、十五年間のモスクワ滞在のち一九四六年初頭に突如ハルビンに現われたが、それは「北滿に共産政權を樹立する」ためであつたとの推測もある（前掲、『中華人民共和国の成立をめぐる中ソ関係』）。東北抗日ゲリラの指導者として知られた周保中はシベリアへ逃れたのちソ連軍による東北解放とともに復帰し、吉林省人民政府主席となつた。これらの「モスコヴィッチ」の存在を経て高崗の政治的抬頭があつたことに注目せざるを得ない。

もともと、東北については、スターリン自身が「私は中共軍の東北進駐に同意しなかつた」

（蔣中正『中国のなかのソ連』と語つたといわれている。そして、一九四五年の中ソ友好同盟条約でソ連は、蔣介石政府の「弱身」を利用して、中国長春鉄道、旅順口、大連港など、帝政ロシアが東北にもつていた權益を回復したのだが、日本降伏直後のソ連の対東北政策は、(一)スターリンがポツダムとヤルタの両会談でソ連に割り当てられた地域の軍事占領、(二)満州の産業設備と機械類をできるだけ多く押収してソ連に移す、(三)日本人戦争捕虜をすべて安価な労働力としてソ連に移す、というものであつた（マッキントッシュ、前掲書）。この点について台湾の研究者、鍾

燾は、「中ソ両共産党の闘争と中ソ両国、両民族間の闘争」（『問題と研究』一九七四年新年号）のなかで、「一九四六年、中国政府が理を説き情を説いて東北の主権問題を守るため、モスクワでソ連と交渉を行っていたとき、ソ連軍は東北で強盗式の略奪を開始し、数カ月の間に、中国が絶対的主権をもつ東北の各工業設備と大型機械、動力設備を略奪し運び去った」と述べている。周知のように、日本敗戦後の満州におけるソ連側のこのような行動については、日本人自身が多数その目撃者になっているのだが、鍾燾はさらに、「奪い去られた工業設備や機械は一九四六年六月に満州へ到着したアメリカ『賠償委員会』へ Edwin W. Pauley の率いた米国経済調査団のこと——引用者✓の計算によれば八億五、八〇〇万米ドル以上に達し、消耗および補充等の費用を含む損出は、二十億米ドルに達している」と指摘している。

こうした状況のなかでソ連は、四五年の中ソ友好同盟条約に基づいて蒋介石政権と折衝しつつ、他方では中国共産党がソ連占領中の満州に入ることを助け、北満のハルビン、チチハル、吉林ややがて長春を中国共産党に占拠させることとなったのである（これら共産党の動きについては P. C. Jones, *manchuria since 1931*, 参照）。もとより、中ソ両共産党の密接な接触のもとにこうした行動が展開されたとはいいいがたく、たとえば、当時の状況について、「まったく奇妙な

ことだが、ロシア人はこのとき中共ではなく、蔣介石を助けていたのである。義勇軍および林彪將軍の部隊が地方をひきついでいた時期に、ロシアの赤軍は蔣の將校たちを滿州の各都市に着任させ、長い間彼等を保護した」(ジャック・ベルデン『中国は世界を揺がす』)というような記録もある。それだけに、毛沢東にとって東北を固めることが是非とも必要であった。毛沢東が東北根拠地の建設をいかに重視していたかについては、彼自身の演説「強固な東北根拠地を築こう」(一九四五年十二月二十八日)がそれを端的に示している。このような経緯のちに一九四八年以降、高崗の指導下に東北建設が進められてきたのだが、やがて四九年十月の中華人民共和国の成立は、毛沢東訪ソによる中ソ会談と新しい中ソ友好同盟条約および中ソ間の諸協定を成立させ、ソ連の東北における利権には大きな制約が課せられていった。中ソ協定はこう表明している。

「ソ連政府と中国政府は、一九四五年以来、極東の情勢に根本的变化が生じたことを確認する。∴ソ連政府と中国政府は、この新しい情勢が中国長春鉄道、旅順口、大連港の問題への新たな処理の可能性を提供するものであることを認めた」(「中国長春鉄道、旅順口および大連にかんする中ソ協定」)。一九五〇年の毛沢東訪ソによる中ソ会談は、こうした新しい情勢のもとで中ソ両国が必要とした歴史的な首脳会談であり、スターリンと毛沢東の長期のコミュニケーション・

ギャップを埋める田豈論文が指摘するように、それ以外にも高崗とその東北特殊化問題についてスターリンと協議することが毛沢東にとって重要な目的であったろうことも否めない（「高、饒『反黨聯盟』始末」）。すでにこれまでの本研究の報告書が詳しく指摘したように、スターリンと毛沢東の中ソ会談は、中国にとって一定の成果と毛沢東にとっては根深い対スターリン不信感を残したが、このような結果であったけになお高崗の存在は許せないものになってゆく。高崗を「国際主義者」と見る今日のソ連の立場からすれば、「中国がソ連の援助を受けて経済的混乱から立ち直り、国際的地位が強化されるや、ソ連との大規模な協力は中国内の国際主義的傾向を急速に増大させ、毛派の党、政府内での影響力を奪いかねないと、毛沢東は考えるようになった」（前掲、V・グルーニン論文）とみなされ得るのである。こうして、高崗はスターリンの死という状況変化の直後に摘発されてゆくのである。

六、スターリンと高崗

これまでの検討において、高崗事件の国際的背景つまりスターリンとの関係については、ほぼその輪郭を明白に描くことができよう。スターリンと高崗との関係については、これまでも一般的に推測されてきてはいた。その代表として、中ソ関係に詳しく、現地に状況を尋ねてもいるクラウス・メーネルトの推測をあげるなら、彼は高崗事件とスターリンとの関係について、一九六二年刊行の『北京・モスクワ』のなかでこう述べている。

「私は中国での話し相手にこの事件の背景についてどう思っているかといく度も尋ねた。だけれども正確なことは知らなかったが、二、三の例外を除いて彼らは高崗ががむしやらに独立を求めながら省長に許されている以上に緊密にスターリンと協力したのではないかと思うと語った。私自身、正確な資料がないので判断は避けたいが、毛沢東が中国全土に勝利を収めた時に、スターリンが満州に北京かの若干独立した国家が生まれるよう助長し、かつこれがかつて満州国に属していた外モンゴルのようにモスクワの衛星国にしようとしたのだとすれば、理解できなくもないで

あろう」（『北京・モスクワ』）。

この周到的記述のなかから、高崗事件については、中国国内でもスターリンとの関係がほぼ暗黙のうち知られていたことが推察できる。そして、クラウス・メーネルトがおこなった推測は、今日、さらに数多くの状況証拠や未公開資料によって裏付けられるようになったのであるが、高崗事件とスターリンとの関係は、はやくからかなり一般的に推測されていたのであり、また、中国共産党の公式文献のなかに、それをにおわせるような記述もあったのである。たとえば、一九五六年の「スターリン批判」に関連して中国共産党が発表した有名な論文「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」は、「一九五三年にはまた高崗、饒漱石の反党同盟がわが党内にあらわれた。この反党同盟は、国内および国外の反動勢力を代表し、革命事業に危害を加えることを目的としていた」（『人民日報』一九五六年四月五日、傍点、引用者）と述べている。この記述は高崗事件がたんに内政上の問題ではなく、国際的関連を有したものであることを示唆しているが、東北を舞台としたこの事件で「国、外」とはなにを意味するのであろうか。右の論文が発表された時点で中国共産党は、「抗日戦争の時期にはまた、王明同志を代表者とする右翼日和見主義の誤った路線がわが党内にあらわれた」（前掲論文）と述べて、当時はまだ「王明同志」という

表現を用いていたが、一貫して「親ソ派」の領袖であった王朝は、昨一九七四年三月、モスクワで客死している。筆者は、その王明が要人墓地としられるモスクワのノボラヴィチ修道院墓地に手厚く、しかも「要人」として墓の一角を占めて葬むられている現場に立ち、中ソ関係史と中国共産党の党内闘争史との微妙な関係を思わず再認識せざるを得なかったが、高崗事件は、もしもそれが成功すれば、きわめて重大な問題が生じたであろうし、また、そのような可能性にもっとも肉迫した事件であったといえよう。先の「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」論文が、高崗事件につき、「もしも党中央委員会がいちはやくこれを発見して、ときをうつつきずこの反党同盟を打ち破らなかつたならば、党と革命の事業のこうむる損失は、計りしれないものがあったであろう」（『人民日報』一九五六年四月五日）と述べ、毛沢東自身も同じ時期に「そうではないれば、高崗をもう一年のさばらせることになり、それは想像することもできないおそるべきことであった」（「中央政治局拡大会議での講話」、一九五六年四月、『毛沢東思想万歳』所収）と語っている。その「計りしれない損失」や「想像することもできないおそるべきこと」こそ、スターリンと結んだ高崗が北京に「親ソ政権」を樹立するのみならず、それを拠点に党中央の権力を奪取しようとしたことではなかったか。スターリンの企図と行動のパターンからして、この

ような「陰謀」を支援したであろうことは推測に難くない。それだけに、毛沢東と中国共産党中央にとっては、高崗事件の摘発が急がれたのであろうが、それをソ連側の視点から見れば、ソ連との協力関係の強化による中国の経済的・国際的地位の強化が、中国国内の「国際主義者」、つまり「親ソ派」を急速に増大させ、毛沢東の権力を奪いかねないと考えようになつたとみなされるゆえんであろう（前掲、V・グルーニン論文、参照）。

ところで、先の王明ら「親ソ派」幹部の消息が途絶えたのは、高崗事件以後であるといわれており、田豈はこの点を、「高崗・饒漱石の失脚と同時に、陳紹禹／＼王明の本名——引用者Vおよび李立三の消息も途絶えた。これは必ずや高崗・饒漱石事件と関連をもつことである」（前掲、『中共高・饒事件面面観』）と述べている。

さらに、今日の中国の公式見解では、すでに見たように、高崗事件には、のちに「三面紅旗」政策や「スターリン批判」以降の中ソ論争との関連で毛沢東らと対立し、「修正主義者」、「フルシチョフ主義者」として失脚していった彭徳懐らが連繫していたことになっているが、高崗事件が彭徳懐事件と結びつけて論じられていることそれ自体が、高崗事件とソ連との関係の存在を示していると考えられよう。なお、この点で、フルシチョフが一九六〇年六月のブカレスト会議

で、「高崗は、中国共産党の誤った対ソ政策に反対したという、ただそれだけのことで罪を得たのだ」と語ったというエピソード (David A. Charles, *The Dismissal of Marshal Peng Teh-huai, The China Quarterly* Oct. - Dec. 1961.) は意味深か。

これまでの検討で明らかのように、高崗事件は、きわめて深刻かつ重大な国際的背景を有していたのであるが、この点でさらに検討を加えねばならない問題は、朝鮮労働党内部における「親ソ派」粛清事件との関連であろう。一部にはすでに知られているように、一九五〇年八月、朝鮮労働党内部では南労働党の指導者として、また土着派共産主義者として知られた朴憲永らが粛清され、同時に、「親ソ派」ないしは「モスコヴィッチ」の許嘉誼らも粛清された。われわれがすでに『朝鮮戦争をめぐる中ソ間の秘められた対立』(一九七五年一月)において検討したように、スターリンのアジア戦略との関連をも有して勃発した朝鮮戦争は一九五三年三月のスターリンの死後、同年六月にようやく停戦に到ったものであり、まさにスターリンの死のうちに、北朝鮮内部で許嘉誼、朴憲永らの粛清事件があり、中国では高崗事件の摘発へと進んでゆくこの関係を無視することはできないであろう。田豈は、朴憲永、李承燐、許嘉誼らの粛清事件とスターリンの死、高崗事件との関連を指摘したのち、高崗事件は陳紹禹(王明)、李立三、倪志高らの「親ソ

派」幹部とも関連があったとして、彼らの名前が高崗事件で表面に出されなかったのは国際関係に及ぶ影響への配慮、つまり「第一にソ連を刺激することを避け、第二には、中共とソ連とのあいだの各種の角逐が暴露されるのを避けるためであった」（前掲、「高・饒『反黨聯盟』始末」と推測している。アジアの冷戦下にあつて、中ソの一枚岩的団結と社会主義陣営の強化が叫ばれていた当時の国際環境のなかでは、いわば当然の帰結であつたといえよう。

以上のような状況と当時のスターリンの絶対的権威および中ソ両国間の当時の力関係を顧みるならば、高崗事件の摘発がスターリンの死をまっぴらにしてはじめて可能であつた事情を十分に理解することができる。高崗とスターリンとの結びつきが強かつたからであらうが、スターリンの危篤に際しては、毛沢東は高崗を伴つて在北京ソ連大使館を見舞に訪れ、スターリン死後北京でおこなわれた「スターリン追悼会主席団」の名簿では高崗は劉少奇よりも先に第三位に名前を連ねていた（前掲、許冠三「『高・饒反黨聯盟』原委へ上』」）。だがその高崗にたいして毛沢東は五三年十二月二十四日、ベリアがソ連の最高法院で正式に断罪されたその同じ日に党中央政治局会議で警告を発し、「党の団結強化にかんする決議」への建議をおこなつたのである。こうして高崗摘発の火ぶたが切られてゆくのである。

では、そのように高崗と関連のあったスターリンは、どの程度まで本格的に高崗らを支援したのであろうか。

毛沢東は、スターリンと高崗との個人的関係について一度だけ言及して、「スターリンは高崗を大変ほめあげて、わざわざ車を一台贈った」（「成都会議での講話」、一九五八年三月、『毛沢東思想万歳』）と述べているが、中国革命の勝利者としての毛沢東をモスクワに迎えたとき、スターリンには、毛沢東をまえにして、やはり迷いがあったのであろう。当時、東北にいた一中国人は、東北で高崗がどのような評判であったかを綴った文章のなかで、事がうまく運ばなかった際にたいするスターリンの日和見的な態度を示唆したのち、「もしもスターリンがもっと果斷であれば、高崗はとくに『東北王』に成ったであろう」（前掲、余逸楽「東北人説高崗」）と述べている。このようなスターリンの態度を裏付けるかのような証言がフルシチョフの回想であろう。フルシチョフは、駐中国大使であり、情報将校でもあったパニューシキンが高崗と接触していたときの報告をモスクワを訪れた毛沢東にスターリンが示したとして、「スターリンは毛の信頼と友情を得ることを決意、このため彼はパニューシキンと高崗との会談についての報告を取り上げ、それを毛に手渡して言った、『ごらんなきい、これを読んだら興味を感じるかもしれま

せん。『スターリンの肚の中を知るのは、ただ神のみである』と回想している（前掲、『フルシチョフ最後の遺言』）。

もしも、この事実が正しいとするならば、スターリンの意図はどんなものであったのか、様々な推測が可能であろうし、フルシチョフ自身、この点を次のように推測している。「なぜスターリンは高岡を裏切ったか？ それは彼独得の邪推深さによるものと私は思う。……彼の計算によれば、早晩毛は高岡が彼に情報を提供していることを自分で知るであろうし——もしもそうなれば、毛はスターリンを中共政府への妨害を挑発したとしてその責任を問うてくるだろうというのであった。そこでスターリンは高岡を犠牲に上げ、それによって毛の信頼を勝ち取るのが賢明だと考えたのである。しかし、私は毛は決してスターリンを信用していなかったと思う」（『フルシチョフ最後の遺言』）。いずれにせよ、当時のスターリンの行動はいかにもスターリンらしい選択であったと思われなくはない。ともあれ、毛沢東にとって幸いなことに、スターリンは一九五三年三月に死んだのである。このスターリンの死こそ、高岡らの末路を決定づけることになったことは疑いない。

このように高岡事件は、中ソ関係史と中ソ対立の歴史的構造のなかに深く組み込まれた重大な

歴史的事件であったといえるのである。